今月の御聖訓

【巻あり。今一隅を指して三方を知らしめん。】（法相）

法相

（宗の人は成唯識を以て尊主と為し、法華の義を屈して唯識に帰せしむ。法華）

宗ノ人ハ以テ成唯識ヲ為シ尊主ト、屈シテ法華ノ義ヲ令ムレ帰セ唯識ニ。雖モレ讃ムト法華

（経を讃むと雖も還りて法華の心を死す。故に湛然の記に云く、）

経ヲ還リテ死ス法華ノ心ヲ。故ニ湛然ノ記ニ云ク

（唯識の滅種は其の心を死す。【当知其】）

唯識ノ滅種ハ死ス其ノ心ヲ。【当レ知ル其ノ】

【秀句十勝抄　新定二三九八頁】

目　　次

今月の御聖訓

年頭の辞……菅野憲道　1

お講講話「平等と差別」……菅野憲道　2

年頭にあたって……尾林弘三　8

【新年の抱負】松井輝雄・森　秀之・寺川晴美……9

読書案内『注文をまちがえる料理店』……松田銘道　13

御書と日興上人〔158〕……松田銘道　14

【寄　稿】「『忘れられた総講頭』を読んで」……山上弘道　16

恵日だより……20

表紙写真　撮影：菅野和幸氏　　題字：立正安国論より拝写

年頭の辞

謹賀新年

菅野憲道

令和二年明けましてお芽出とうございます。

「ＯＮＥ　ＴＥＡＭ」（ワンチーム）、昨年度のラグビーＷ杯の日本チームの活躍は記憶にも新しい。守っては全員が怪我も怖れず身を挺して大男の突進をくい止める。相手ゴールに向かっては次々にオフロードパスをつないでトライに結びつけた。職業や民族・言語も異なる男たちが目標のためとはいえあそこまで一体化するものか、身勝手な個人主義が目につく社会に、見事に「One for all, All for one」の姿を具現してみせてくれた。

ところで仏教では衆縁和合という見方がある。「これがあると、かれがあり、これが生まれることで、かれが生まれる」（相応部経典）という縁起説は、あらゆるものは網目のようにつながっていて、それ自身だけで完結して存在しているものなど何も無いないことを教えている。法華経でも、末法の衆生は我慢の心が強く小さな我に閉じこもってしまいがちであるが、もともと人は一切衆生や法界と一体となった存在であることを説いている。

「例えば種子があり、大地があり、水があり、風があり、肥料があり、時があり、人の力があり、これらが和合して芽が出ることを考えて見よう。この時種子は「私が芽を出す」とは言わない。ほかのものも「私が芽を出す」とは言わない。芽自身も「私が芽を出す」とは言わない。」（涅槃経）……衆縁和合して一体と見るところに真の自己を生かす道が見えてくるに違いない。

「ＯＮＥ　ＴＥＡＭ」これは仏教のものの見方に通ずるものがあるように思う。今年も異体同心で精進しましょう。

お講講話（要旨）

拝読御書　「開目抄」（全集一九四頁）

平　等　と　差　別

菅　野　憲　道

最初に「開目抄」に引かれている宝塔品の一節を拝読します。

「善きかな善きかな、釈迦牟尼世尊、能く平等大恵・教菩薩法・仏所護念の妙法華経を以て大衆の為に説きたまふ。」（全集一九四頁）

《差別に反応する社会》

最近、平等ということについていろいろな問題が起こって、マスコミなどに報じられています。一つは文部科学省の管轄する大学受験において、英語課目でスピーチテストを業者に委託して実施する予定だったのですが、それがいろいろな問題が出て急に延期になりました。

大学受験では英語が大きな要素を占めており、中でも読み書きは従来から好成績でしたが、聞く話すは低調で、義務教育期間をずっと学び、高校・大学で学んでも、ほとんどしゃべれないというのが英語教育の実状のようです。そこで試験にヒヤリング（聞く力）だけでなくスピーチ（話す力）も取り入れることになり、その実施を外部委託することになったのです。

ところが計画が明らかになると、受験費用や会場の関係で裕福な家庭の子でないと簡単には受験できず、地方、特に田舎に住んでいる子達が不利益を被り、平等公平な受験が出来ないというので、反対意見が急増したのです。

そうこうしているうちに、他の国語や数学等でも記述式の問題（文章で解答する問題）が出題される計画でしたが、採点者が何万人もいて公正平等な採点が出来るのかが問題になり、採点者には事前に問題が開示されて漏洩が心配される懸念もあり、これも延期になったものです。

このように、たとえ試験内容を改良する計画であっても、教育における機会均等や平等性を損なうことは、社会の基本理念に反するものとして厳しい批判にさらされます。

また、二・三ヶ月前に、池袋で通産省の工業技術院の元院長（八十八歳）が、予約していたレストランに遅れそうになってあわてて車のアクセルとブレーキを踏み間違え。暴走して歩道に突っ込み、十一人の人が死傷したという事件が起きました。

この時に問題になったのは、重大事故を起こしたにもかかわ

らず、警察が運転者を逮捕しなかったことです。普通はこれだけの事故なら重過失で即逮捕されるのでしょうが、逮捕せずに帰宅させたのです。これがネット上でも騒ぎになって、いわゆる元高級官僚だから警察が忖度して逮捕しなかったのではと、「上級国民」などという造語が出来て、特権的に逮捕されなかったのではないか、といった批判がくり返されたようです。

即ち同じく重大な交通事故を起こしていながら、ある人は逮捕されてある人は逮捕されないという、平等性を疑われるようなことが起こり、当否はともかく、ここでもまた「法の前の平等」ということが大きな関心を呼んだのです。

さらに、安倍首相が「桜を見る会」を催して、自分の選挙区の後援者を優先的に招待していたことが発覚して、そこからかいま見えてきた問題は、ついうっかりと簡単に済むようなことではなく、場合によっては公職選挙法違反で議員辞職につながりかねないような話も出ております。

ご周知の通り、近代社会は自由・平等・博愛というフランス革命以来の理念を非常に大切にしてきたのです。

平等という概念を身近かで具体的に分かる例があります。ある家庭で五人兄妹のおやつに一本のカステラをもらったことにします。兄妹でそのカステラを切って分けるのですが、きれいに平等に分けないと、必ず騒ぎになるものです。人は平等に扱われるべきということは、三才の頃から学んでいる大切な理念であって、自我意識の形成と相まって、自分が認められることと通ずるものがあるからです。それを差別されることは存在に関わる問題となって争いが起こることになると思うのです。

しかし、現実問題として、世の中は平等にはほど遠く、人種、信条、性別、出身門地、職業等によって政治・経済的に多くの不条理や不合理な差別に満ちていて、それに対する戦いが近代社会の目標でもあったのです。

権力の私物化は民主主義の根幹を揺るがす

日本では戦後の新憲法においてようやく旧弊を脱し法の下に平等が保証されて、平等な社会が実現したわけです。

しかしそれでも世の中にはいろいろな不公平が満ちていて、格差や貧困の問題、ハンセン氏病問題、正社員と派遣やパートの給与格差、税制などが問題になりました。

《仏教の平等》

ところで、初めに拝読しましたように、宝塔品では、この法華経のことを「平等大慧」と形容されております。「平等大慧」とは諸法平等の理をもって一切衆生を平等に利益する諸仏の智慧そのものが法華経であり、法華経は平等の教法を説くものです。

原始仏教でも平等は重視されてきました。インド社会の仕組みは、当時も今も四階級のカースト制度が残っていて、上の方から聖職者、その次の王族、商工業者、四番目が隷属民といって、使用人、下人のような最底辺の人です。さらに、もう一つ下に不可触賤民といって、ほとんど人間扱いされないような階

層もあるのです。

こういう厳しい差別社会にあって仏教では、紀元前四・五世紀前から、釈尊は「四姓平等」を説き、旃陀羅を入門させ、

「人は生まれ（カースト）によって賤しい者となるのではない。生まれによって尊い者となるのでもない。人は行いによって賤しい者ともなり、行いによって尊い者ともなるのである」（法句経意訳）

と、徹底した平等主義を説いたのです。

ただし、仏教でいう平等とは、社会改革の理念というより、思想・哲学的に、ものごとの有り様について諸法平等の原理を説いたものです。

例えば人生を考えてみますと、自分がいつどういうところに生まれるか、自分で選択はできません。

黒人とか白人といった人種、時代から民族や国家、家庭環境とか父母等に至るまで、自己を自己たらしめている要件を、自分が生まれるに当たって、これを選ぶことは出来ません。

さらに身体的個性、健康とか能力、容姿といった先天的な個性も千差万別で、まったく平等ではないのです。

これは、現代でもアラブや欧州の王室の王子に生まれる赤ちゃんもいれば、アフガニスタンやソマリア等の戦火の下で生まれる赤ちゃんもいることを考えて見てください。平等どころか、生まれた当初から説明のつかない深刻な差別があります。これでは法界は少しも平等ではないことになり、理解不能な人生に苦しむようなことになってしまうのです。

自由・平等・博愛を掲げたフランス革命

現代人の多くは、生は意味の無い偶然の産物で、死んだら無に帰すると考えるような生命観です。これでは、結局は五欲に流されて迷いの世界を彷徨（さまよ）う事になります。

一方、世俗の権力や財力のみを信ずる人は、覇権闘諍の人生の終わりに盛者必衰の失意を味わうことになるでしょう。

またもし、キリスト教などのように、唯一絶対の造物主の神によってこの世界が創造されたという信仰では、善悪邪正をとりまぜて不完全な人間を作ったのも神であり、万能の神にその責を負わせれば二律背反になります。その上、現実世界においてなぜ千差万別の相が展開しているのか、その意味は少しも触れないのです。

また合理的に物事を考え、自分の目に見えるものしか信じないような人でも、因果律を道理とするものですが、世の中には、悪事を重ねても少しも報いがないとか、あるいはまじめに善い行いをしていても、次々不幸に見舞われたり、早世したりする、まったく不運な人たちがいることも確かです。世の中には悪が栄えて善が滅びるような例もあり、これをどのようにみるか、どのような思想や教義でも納得いく説明はないのです。

《三世両重の因果》

それに対して、仏教は明確に一つの解答を与えます。それが十二因縁の三世両重の因果という見方です。

今時の人間は、あまり過去世も未来世も深くは信じないようです。人の一生は偶然この世の中に生まれて、それぞれに不合理な人生を生きているような見方が多いようですが、決してそうではないと説くのです。

昔は仏教のいわゆる輪廻転生という考え方を受け入れて信じている人が多かったようです。

十二因縁の、無明・行・識・名色・六入・触・受・愛・取・有・生・老死という十二が、次々と連関して、車の車輪が回転するように、それをくり返しているという教えが輪廻思想の元です。

無明（過去世の惑）と行（過去世の業）は、過去世の因として働き、現在の世の果＝識（生命活動）、名色（心身）、六入（眼耳鼻舌身意）、触（接触と認識）、受（苦楽などの感受）＝我見が形成されるというのが第一重の因果です。すなわち過去世からの無明と業によって、現在世の煩悩形成につながるわけです。我われの心の奥底に、それぞれに多様な自己中心的な煩悩が具わっているのです。貪欲の心にしてもいろいろな欲求があるのですが、中には不道徳的な欲求もありますし、あるいはまた自分でも理由がわからないような衝動的な怒りとか、どうしようもない淋しさや悲しみ、あるい根拠の無い自信とか、いろいろなものがあるのです。

そして、そういう心理は何時から出来てきたというのではなく、過去世からそういう要素は伏在していたと見るのです。

確かに人間が生まれてくる時、同じ両親から生まれてきた兄弟でも、ずいぶん性格は違うものです。中には、ぼうっとしている子もいれば、中には意地汚い子がいたりとか、子供の頃から性格が違うというのは不思議な気がします。決して別々の環境で育ったものではなく、同じような環境で育っても、やっぱり持って生まれたものがある。遺伝子とか、先天的な特質を含めて、そういうものが過去世の無明や行（業）に起因するという。これは受精や誕生以前のことですが。現在世の果である識とは、要するに生命活動の始まりで、生命の灯（ひ）が受精細胞にポッと点ったような状態です。そこからどんどん細胞分裂を起こしていって、そして小さい球体から胎児の形を具えるというのが名色から六入、六入とは六根のことで、手足とか器官等が形成される状態です。そこから間もなく感覚が具わり、感受が生じてくるということです。それが今の現在の働きです。

それから愛・取・有・生・老死の愛・取・有とは、今現在我われが行っている行動のことで、愛は執著することで、好き嫌いやこだわり大事にしているものとどうでもいいものと取捨選択して、自分の回りに集めて生活しているのです（現在世の業因）。

有とは今の現実の人生が確実に存在しているものだという有の感覚にとらわれることです。実際には時間が経つとともに、あらゆるものが幻のように消滅してしまうのですが、我われはこの現実こそがすべてであると唯物論的な考え方に立って物事を見ていることから、誤った見方に矛盾が生じてきて、やがて生、老死という未来の苦果を得ることになるのです。

このようにして、過去世の因が現在世の果をもたらしており（第一重の因果）、現在世の煩悩の働きと行為は、それぞれの

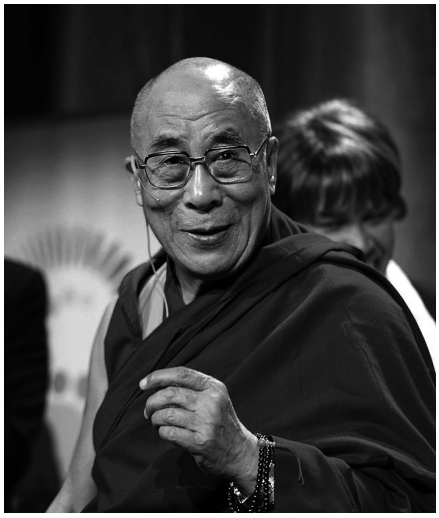
未来における生・老・病・死の苦果となって現れるというものです（第二重の因果）。

しかし、十二因縁からだんだん話がずれて、誰々は過去の何々さんの生まれ変わりだとか、ダライ・ラマのように、この人が死んだら少年のところに転生して生まれ変わるというような極端な説にまで発展するのです。

しかし、そういう輪廻転生のようなことは、仏教の本来の考え方ではないのであり、諸法無我とか諸行無常という事を考えると、一個人のAさんが生まれ変わって一個人の，Aさんになるというのは、無我という考え方とは矛盾するし、また、人口がどんどん増えている事も説明が付きません。

生物進化論の説によれば、最初は五万年前アフリカあたりから、今の人類（ホモ・サピエンス）の祖先が始まったようですが、その頃は数千から数万人ほどしかいなかったと考えられております。それがどんどん増えて、現代は爆発的に増加し七十七億もの人口になっているのです。そうすると、輪廻転生ではそろばんが合わないことになります。

ですから一個人Aさんがまた生まれ変わったということではなくて、ただ因果の理法といいますか、生命現象の底に貫かれている法則みたいなものは、ずっと働いているということだと思います。輪廻転生説は、一つの神話や譬喩のようなものであって、人間の心やいのちがどのように形成されるかは、決して今世だけで決まるのではなく、三世に亘る妙法によるというのです。



ダライ・ラマ

《平等差別と一念三千》

平等を追求し、どれほど政策を作ってみても平等な社会が実現するとも思えません。万人の顔がそれぞれ違うように、人の心も様々だからです。

人の一心一念には三千種もの世界があって、その三千の特殊相の表面だけを見れば、千差万別の世界が無秩序に展開しているように見えます。しかしその根本となるのは十界互具、一念三千の妙法であるということに心をとどめて信を奮い起こしていけば、妙法と一体となった法界平等の成道を感得することになると思います。

実際問題として、我われが死んだ後にどうなるかは、我われの思考の範囲を超えております。生まれてくる時も不思議な因縁によって生まれてくるのですから、死んだ先もまた同じように我われの思慮を越えたところにあるのであり、妙法と一体となった信こそ我慢偏執を破り生死を超える道だと思うのです。

法華経は、三千世間という千差万別の様相を呈している世界も、みな一念に具わっていると説いて、そこから我われ一切衆

生にも仏性があり、誰もが仏になれる、それが十界互具ということ。本質的にはみな平等に仏性を具すけれども、それぞれの因縁によって差別の仮の姿となることを説いているのです。

ただ人間は、少しでも努力して自他の執情を越えて利他の方向へ努力していくことが肝心なのですが、本から仏性が具わるというような現実肯定が行きすぎると、煩悩肯定の病を深くして、そのことが仏教全体の堕落に結びついてくるのです。

日本仏教は、ある意味では本覚思想、あるがままでいい、もともとから仏であるという考え方が間違った方向へ展開して、人間や社会を堕落させることがあるようで、そのことから大聖人が、法華経の行者という振る舞いによって、あるがままでいいということではなく、妙法蓮華経に信を置く人の志は必ずその振る舞い（行）に現れるのであり、色読身読の行法こそが我が身の仏性を確認するという事一念三千の行法を示されたのです。

さらには、みずから「施陀羅が子日蓮」と称されて、身分社会・階級社会の差別の価値体系を、法華経の一念三千の平等の価値体系で打破されたのです。

しかし「善無畏三蔵抄」には「常平等」「常差別」ということが説かれ「観心本尊抄」では「父母の慈愛が病む子に厚いように仏の慈悲も同じである」と平等に即しての差別が説かれます。このように法華経は難しい法門で、あまり平等にだけに偏ってその意を失うと、

「法華経を讃むと雖も還りて法華の心を死す」（全集一〇八一頁）

ということになりかねません。

人間とは愚かなもので、人に対しては平等を要求していながら、自分だけは平等ではつまらない、自分だけを特別扱いして欲しいというような身勝手さが根底にあるものです。

そういう意味では、法華経が平等に一切衆生を導き護ること薬草喩品の雲雨草木の譬で、自然界の草木に同じように雨が降って、生き生きと蘇生させるのです。その時に、大きな木には大量の雨が降りかかりますし、小さな木には少量しか降りかかりません。草にはもっと少しです。それが真の平等なのです。

あるいは、同じ子供でも、親は可愛さに変わりはないのですが、健康でしっかりしている子は多少ほっといても大丈夫だから、病気を持った弱い子を手厚く世話をするというところに、本当の平等の慈愛があるものです。

我われも仏の計らいを信ぜず表面だけを見て公平でないとか運が悪いなどと文句を付けたり、また自分の心の中に、自分さえ良ければいいという心を隠し持ちながら、人には平等を要求するようなことは、法華経の精神に外れていることを、考えなければいけないことです。人々の心の問題、正しい信仰によってエゴを解消するということを抜きにして、本当の意味の平等ということは実現されないのではないかと思うのです。

宗教や思想の問題を抜きにして、ただ単に制度を作るだけでは、すぐに形骸化して新たな差別を生むでしょう。

最近の大学受験の話や桜を見る会の話、交通事故の話などを聞き、また格差が大きくなる世界で、どこに平等ということが実現されるのかということを、改めて思った次第です。

南無妙法蓮華経　（了）

謹賀新年

令和二庚子年（かのえね）

年頭にあたって

講頭　尾林弘三

新年あけましておめでとうございます。

令和二年の新春を寿ぎ源立寺法華講の皆様のご多幸とご健康をお祈り申し上げます。

昨年も日本各地で台風や短時間の記録的な豪雨による、土砂崩れや河川の氾濫で、家屋の浸水や倒壊、また田畑の水没等で甚大な被害出ております。

ご住職様が、『恵日』十月号の「難を乗り越える信心」と題してのお講講話の、「難を乗り越えてこそ得るもの」の項で、世間ではよく「本音と建て前」あるいは「理想と現実」と言いますが、最近は理想を語ることが少なくなって現実ばかりが強調されて、現実は何かと人間の動物的な欲求をむき出しにしたような競争社会ではないかと思うのです。

トランプ大統領はアメリカファーストで、自国の国益だけを追求する思考は、公正や共存共栄の理念とかけ離れ同じ地球市民として人類全体の平和と幸福を願う究極の理想とは正反対の力となって不信と分断を深めています。

もともと仏教の人間観は十界互具とか一念三千といって、我われ自体がいろいろな心を持っている人間だといっています。したがって本音と建前があることは、自然なあり方です。ただその時に、どちらの心を押さえてどちらの方向へ心を向かわせるかというところに、我われの信仰があるのだと思うのです。

法華経の信仰は人間として最高の道、仏道を初めて教えてもらって、それを少しでも実践していこうということなのです。必ずそこにはいろいろな困難なことが生じてくるのです。その困難なことを、自分たちがよく耐えて、これを克服していってこそ、自分たちの心が鍛えられるのです。と、ご指導されています。

「月月日日につより給え。すこしもたゆむ心あらば魔たよりをうべし。」

と、大聖人は諫められています。

本年五月の総会は、第五十回の記念の総会となります。

どうか法華講の皆様が年の初めに一念発起して、「志」を新たに、「求道心」を起こして自己の信心向上と、「法灯相続」に取り組んでいただくことをお願いして、年頭の挨拶といたします。

新年の抱負

（順不同）

年始のごあいさつ

豊能地区　松井照雄

皆様新年明けましておめでとうございます。

今年はどんな年になるのでしょうか。それにしても二〇一九年はひどい年でした。春先から初夏に掛けて長雨が降り、各地で河川の氾濫・堤防の決壊で、家や人が流されるという災害が起こり、さらに初夏に入ったとたんに猛暑に変わり、各地で例年の平均気温を軽く越えてしまいました。

その他、高圧電線用鉄塔の倒壊・土砂崩れに依る家屋の倒壊等々が起こりましたが、自然環境の狂いがその原因であることは明白です。

そこで大切なのは、本年二〇二〇年の冬の雪の降り方に関心を持って見ることです。積雪の量、気温の下がりと、その範囲を見れば、地球の自然環境狂いの続きを知ることができるかも知れません。

すでに自然環境の悪化・乱調を世界各国が問題視し、国連を中心に動きだしております。

年頭に当たり、私の愚痴に付き合わせ誠に恐縮ですが、これが現実です。人間の英知が勝つか地球の乱調が勝つか。我われも傍観者でおれませんよ。おなじ地球の上で暮らしているのですから。

今年も良い年をお迎え下さいます様お祈りいたします。

「心こそ大切なれ」

大阪地区　森　秀之

令和二年新年明けましておめでとうございます。

また、本年一月号の『恵日』は、ちょうど創刊三〇〇号にあたり、重ねて有り難い一年の始まりになります。

そして、さらに本年は、源立寺法華講総会が、第五十回の節目の一年になります。

益々信心堅固に、一人一人が異体同心に、信心修行に共々に

精進して参りましょう。

微力ながら、一日一日大事に、時間が許す限りご奉公に努めてまいります。

自行として、出来るだけ毎日御書システムで御書を研鑽することと、お寺の年間行事を通じてお寺へ参詣し、法統相続に繋げるように努力することを、本年の年始の誓いとして精進していきます。

源立寺の寺報の『恵日』は三〇〇号となり、一九九五年三月の創刊から、本年で満二十五年を迎えましたが、この間、『恵日』を私の信心修行の道標とすることで、迷うことなく歩むことができているのだ、と自然に感じています。

また、『恵日』への私のつたない山行記や日々の信仰で感じた投稿も載せていただき、感謝の念でいっぱいです。

菅野ご住職には、お身体に留意いただき、ますますご教導をお願いする次第です。

正信覚醒運動を風化させずに、『恵日』が四〇〇号、五〇〇号と続くように、共々に精進していきたいと思います。

さて、新年の抱負として、「持妙法華問答抄」の一節を拝したいと思います。

「一切衆生皆成仏道の教なれば、上根上機は観念観法も然るべし。下根下機は唯信心肝要なり。されば経には『浄心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は、地獄・餓鬼・畜生に堕ちずして十方の仏前に生ぜん』と説き給へり。いかにも信じて次の生の仏前を期すべきなり。譬へば高き岸の下に人ありて登る事あたはざらんに、又岸の上に人ありて縄をおろして、此の縄にとりつかば我岸の上に引き登さんと云はんに、引く人の力を疑ひ縄の弱からん事をあやぶみて、手を納めて是れをとらざらんが如し。争でか岸の上に登る事をうべき。若し其の詞に随ひて、手をのべ是れをとらへば即ち登る事をうべし。『唯我一人 能為救護』の仏の御力を疑ひ、『以信得入』の法華経の教への縄をあやぶみて、決定無有疑の妙法を唱へ奉らざらんは力及ばず。菩提の岸に登る事難かるべし。不信の者は堕在泥梨（だざいないり）の根元なり。されば経には『疑ひを生じて信ぜざらん者は則ち当に悪道に堕つべし』と説かれたり。受けがたき人身をうけ、値ひがたき仏法にあひて争でか虚しくて候べきぞ。同じく信を取るならば、又大小権実のある中に、諸仏出世の本意、衆生成仏の直道の一乗をこそ信ずべけれ。」

この御文を現代語訳で要約しますと、

「法華経は、一切衆生は皆仏道を成ずるという教えだから、機根のすぐれた人は観念観法もよかろうが、機根の劣った人

はただ信じる心が肝要である、と説くのである。だから法華経の従地涌出品には『疑いを起こして法華経の教えを信じない者がいれば、その人は必ず悪道に堕ちるだろう』と説かれている。せっかく受け難い人身を受け、値い難き仏法に値い奉っているのに、どうしてこれを信じずに、成仏の道を閉ざそうとするのか。同じ信を取るならば、大乗・小乗・権経・実経の中で、諸仏出世の本意であり、衆生成仏の直道である法華経こそを信じるべきである。」

ということになりますが、御書にある、ただ南無妙法蓮華経を信じるということが、言葉では簡単ですがこれほど難しいことはない、と私は感じています。

この、ただ南無妙法蓮華経を一心に唱えることで、自然と正信に導いていただけると感じながら、私の座右の銘としている「題目唱えの題目唱えずにならない」ように、慢心を起こさないように留意して、信念受持していきいたいと思います。

新年の抱負

大阪地区　寺川晴美

明けましておめでとうございます。

新しい令和の年、そして十二支の始まりの年となり、自分にとって大きな区切りの年としたいと思っています。

十二支の始まりの子年は、生命力を溜めた種子が芽吹き始める、と聞いたことがあります。今まで自分なりに信じ学び生きてきましたが、もっと真剣に信・行・学を念頭に、大聖人様の教えを心と体で感じ、一番苦手な学を求め、少しでも種子が芽吹くよう精進していきます。

そして周りの人たちに、しっかり正しい法華経の教えを少しでも伝えられるようになりたいと思っています。

時々訪れる図書館。今回の特設コーナーは「認知症」で、関連の本が展示してあった。本書のタイトルには、新聞記事で見覚えがあったので、お借りしてきた。

ホールで働くスタッフは全員が認知症の方という料理店が、二〇一七年六月と九月、期間限定で東京でオープンした。本書はそのドキュメントである。

さっそく読みはじめた。認知症の方々がもたらす笑いと感動に、たくさんの涙をもらいつつ、一気に読み切った。

今や認知症は世界中で社会問題となっている。そのことを、ユニークな視点から話題にした今回の企画は、最初に二日間のプレオープンからはじまった。

ぶっつけ本番であり、水を二回出す、サラダにスプーンが、ホットコーヒーにストローなどなど、まさにめちゃくちゃ。それでもそのことをむしろ楽しんでいる。注文を取りに行ってそのまま昔話に花を咲かせるおばあさんと和やかに話し込む人。間違って料理が出てきても互い融通したりと、心配なこともそれなりに解決していく。

ホールは想像した以上の笑顔で大いに盛り上がっている、

動画を通じてその様子が発信されるや、海外からも大きな反応があった。

それだけに、企画を支えるスタッフは、九月に開催する三日間の本番を万全の体制で臨んだ。認知症のことを話題にするだけの単なるイベントとするのではない。間違って料理が運ばれたとしても、そのことを喜んでもらえるおいしい料理を提供する「料理店」とするために、企画に共感したプロの料理人も腕を振るった。

取材にきた海外メディアからは、

・認知症の人がなぜあんなに笑顔になれるのか、信じられない。

・お客さんがなぜ間違えても怒らないのか、理解できない。

こうした質問について著者は、

「この質問に答えることはできます。でも、それ以上に僕が感じたのは、『間違えちゃったけど、ま、いいか』そういいあえることって、意外と世界中の人が求めていることなのかもしれないな。ということでした。」

とコメントしている。間違いをそれなりに笑顔で受け止める大事さがそこにある。

読書案内

松田銘道

小国士朗 著

『注文をまちがえる料理店』

あさ出版

定価一五四〇円

【御書と日興上人（一五八）】

「立正安国論」書写と「安国論問答」（九二）

松田銘道

前回は、文永十二（一二七五）年三月十日の『曾谷入道殿許御書』から不軽菩薩の折伏行の意義と本書が推敲を重ねて作成された状況について断簡等から検証してみました。今回は、『曾谷入道殿許御書』に示された「一大秘法」についてみていきます。

『曾谷入道殿許御書』は檀越への書状でありながら四十五紙の大著であり、また、推敲を重ねて作成されたことを裏付ける断簡が存在するなど、当時の重要な法義が示された書です。そのことは、他の書状には用例が無い「一大秘法」との用語を用いてあることにも注目できます。すなわち本書には、

「今親り此の国を見聞するに人毎に此の二の悪有り。此等の大悪の輩は何なる秘術を以て之れを扶救せん。大覚世尊仏眼を以て末法を鑑知し、此の逆謗の二罪を対治せしめんが為に、一大秘法を留め置きたまふ。所謂法華経本門久成の釈尊……諸大士にも交はらず。但此の一大秘法を持して本処に隠居するの後、仏の滅後、正像二千年の間に於て未だ一度も出現せず。」

と、「一大秘法」の用語を二度用られています。

最初の「一大秘法」は、書状の十七紙末の十五行目となります。また、二度目は「二十一紙の十五行目です。その間、「所謂法華経」の十七紙末から、「諸大士にも交はらず」までの二十二紙十五行までの四紙には、「一大秘法」が上行菩薩に付嘱される『法華経』の儀式のありさまが示されています。

すなわち、『法華経』「涌出品」第十五にて、大地より上行菩薩等の地涌千界の菩薩が出現したことを契機に、みずからの久遠の本地を「寿量品」第十六にて開顕し、「神力品」第二十一にて法華経の肝要を四句の要法に結んで上行等の四菩薩を上首とする地涌の菩薩に付属し、末法の弘通を託されています。

宗祖はそのような『法華経』の儀式から、大覚世尊が五逆罪と謗法罪の重病者の末法の衆生を治療するために用意された要が「一大秘法」であると説き示されています。

その「一大秘法」を堅持した上行等の四菩薩については、「自分本来の住処である大地の下の「本処に隠居」してからは、仏滅後の正法・像法の二千年の間は出現しなかった」と、上行菩薩の振舞について示され、その理由についても、

「恵日大聖尊、仏眼を以て兼ねて之れを鑑みたまふ。故に諸の大聖を捨棄し、此の四聖を召し出だして、要法を伝へ、末法の弘通を定むるなり。」

と、釈尊が「仏眼を以て兼ねて之れを鑑

み」て、上行等の「四菩薩」に「要法」の五字を授け、「末法の弘通を定」めたことを『法華経』の儀式に求められています。

また、「一大秘法」が日本に弘通することについても、

「随って当世の為体、大日本国と大蒙古国と闘諍合戦す。第五の五百に相当たれるか。彼の大集経の文を以て此の法華経の文を推するに『後五百歳中広宣流布 於閻浮提』の鳳詔、豈に扶桑国に非ずや。」

と、『大集経』にて釈尊入滅後の仏教の盛衰状態を一時期五百年として五つに分け、その第五の五百歳の「闘諍堅固」とは蒙古襲来との合戦であるとされ、それが『法華経』「薬王品」二十三の「後五百歳」の末法に「『法華経』を弘めて断絶させてはいけない」との仏の金言であり、それが「扶桑国」＝日本国を指している、とされています。

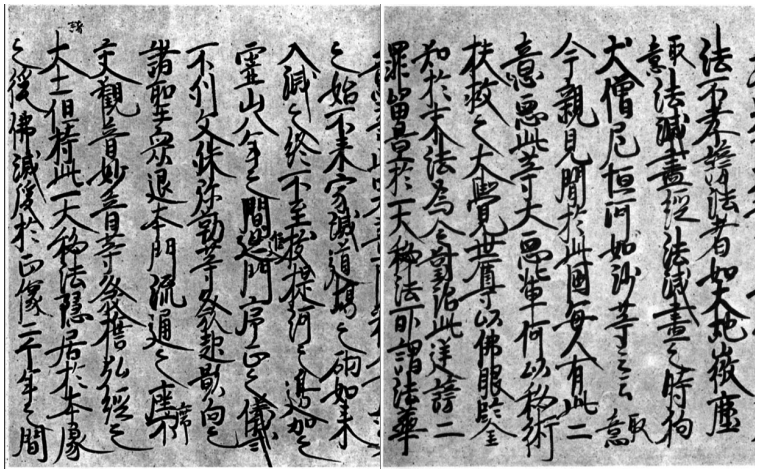
そのことから、「一大秘法」の妙法五字を所持した上行菩薩の再誕についても、

「而るに予、地涌の一分に非ざれども、兼ねて此の事を知る。故に地涌の大士に前立て粗五字を示す。」

とあります。ここには、宗祖ご自身が「地涌の菩薩としての役割をその一分でも担う者ではない」とされつつも、「かねてよりこれらの事情を知っていた」のであり、それ故に、「地涌の大菩薩の出現に先駆け」て「要法の五字」を説き示している、と仰せになっていて、上行菩薩との自覚が示されています。その自覚については、同年の建治元年（一二七五）の『撰時抄』に、

「後五百歳に一切の仏法の滅せん時、上行菩薩に妙法蓮華経の五字をもたしめて謗法一闡提の白癩病の輩の良薬とせんと、梵・帝・日・月・四天・竜神等に仰せつけられし金言虚妄なるべしや」

と、「後五百歳」の末法に妙法五字を堅持した上行菩薩が、「謗法一闡提」＝「白癩病」者への「良薬」とするために出現することは、仏の「金言」であり「虚妄」ではない、と仰せになっていて、ここでも上行菩薩との関連が読み取れます。



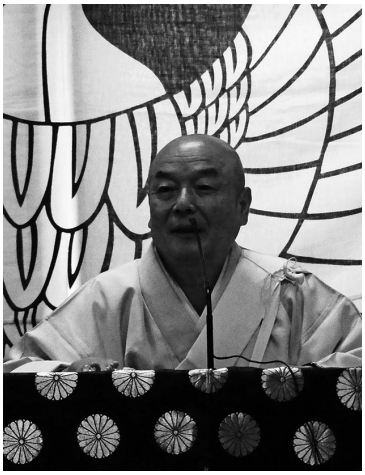
上右：『曾谷入道殿許御書』（真蹟中山法華経寺蔵）。本書には他の書状には用例の無い「一大秘法」との用語が二度用いられている。最初は十七紙の末十五行目（上右、後から１行目）に「一大秘法を留め置きたまふ」とあり、それは末法の衆生の良薬とされた。

上左：『曾谷入道殿許御書』二十二紙の十五行目（後から２行目）には、「一大秘法を持して本処に隠居するの後」と、「一大秘法」の用語を再び用いられている。最初の「一大秘法」の用語を示された十七紙末から二十二紙末までの四紙には上行等の地涌の菩薩に要法が付嘱される法華経の儀式の様相について述べられている。

【寄稿】

『忘れられた総講頭―荒木清勇居士略伝』を読んで

興風談所　山上弘道



山上弘道師

平成七年三月『恵日』は産声を上げた。その一ヶ月半前、一月十七日早暁に起きた阪神淡路大震災により、源立寺はかなりの打撃を受けている。その割に誌面は驚くほど明るく悲壮感は全く感じられないのだが、復興作業のさなか発刊されたこと自体に、並々ならぬ蘇生への気魄が感じられる。爾来二十五年、三〇〇号が発刊されたことを心よりお祝い申し上げたい。

住職菅野憲道師の巻頭言や御講講話は、混迷する社会に、迷走する創価学会などをも含む広義の日蓮正宗宗門に、そしてともすれば怠惰に流れる私たち読者に、かなり手厳しく警鐘を鳴らし続けてきた。しかし愛読者としてずっと感じてきたことは、その手厳しさの根底にある、そうした混迷や怠惰は、必ずや妙法の力によって蘇生するはずであるという、揺るぎない信念である。その厳しさと慈愛とが織りなす指標に、何度目を開かされ激励されたことか。

今改めて創刊号からパラパラとめくっていくと、発刊当初から編集に携わっている現執事大谷吾道師や、当時の執事成田詳道師、その他多くの方々がかかわり支えて、一つの歴史を築き上げてきたのだなと思う。これからも『恵日』が末永く、多くの読者の道標として号を重ね、新たな歴史を築いていくことを心より願う。

◇　◇　◇

「忘れられた総講頭―荒木清勇居士略伝」が『恵日』に連載されたのは平成十一年四月通巻五〇号からであった。荒木清勇については、大正期に立正安国会が日蓮大聖人のご真蹟集編纂のため、大石寺にも協力を要請し、ほぼ了解を得て準備を整えていたところ、総講頭であった氏の鶴の一声で取りやめとなったと聞いていたので、頑固で閉鎖的な昔気質の人という印象で、それほど興味はなかった。しかし読み始めるとグングン心引かれ、連載が待ち遠しくなったことが昨日のことのように懐かしく思い出される。

このたびそれが補訂され、一冊の本に

纏められた。早速筆者菅野憲道師に贈呈していただき、一気に読了した。

本書は単なる英雄伝ではなく、「あとがき」に見られるように、孫である福重広輝氏からの、身内ならではの多くの情報提供を得、それをテコに、さまざまな資料を発見・開拓しつつ、その足跡が綿密に綴られており、失敗談も含めて、まさに生身の清勇居士が描き出されている。また清勇居士が生きた、明治から大正にかけての激動の宗門史が、資料に基づいて清勇居士の動きとともに活写され、さらに寺田屋事件にまつわる新たな情報提供もされており、その点宗門史や一般明治史研究にとっても貴重な資料となろう。

まずは明治史の観点から見ていくと、目次項目「＊出生の地」（ｐ１）では、明治維新の志士たちを輩出した松下村塾との関係が示されている。幼き頃英一（清勇居士の実名）少年は近隣の松下村塾を遊び場とし、かつ村塾最末期に入塾した可能性が高いという。その時値遇を得た塾生たち、ことに十歳年上の伊藤博文に巡り会ったことは、のち総講頭として官権と交渉ごとを行なう際などに、大いに役立つことになる。また村塾主宰吉田松陰が日蓮大聖人の、死身弘法の姿を尊崇していたようであり、このことも、のち清勇居士が念仏信仰から日蓮正宗へ改宗する要因の一つではないかとしている。

また「＊伏見の寺田屋」（ｐ６）では、薩摩藩士が同士打を演じたいわゆる寺田屋騒動の舞台となった、京都伏見の船宿寺田屋と清勇居士との縁が述べられる。伊藤博文の従者として訪れて以来、女手一つで宿を切り盛りしていた登勢に気に入られたようで、やがて三女きぬと所帯を持つことになる。

面白いのは坂本竜馬が寺田屋で、伏見奉行所の捕り手に囲まれたながらも虎口を逃れた際に、諸文献では龍馬の愛人お竜が入浴中にそれに気付き、濡れ肌に袷一つで裏階段を駆け上り急を知らせたことになっているが、荒木家の伝承では、風呂に入っていたのはのち清勇居士の妻となる、この時十二歳のきぬであり、お腰一つで異変を知らせたとされている、というくだりで、なんといっても身内の証言であるから、多少艶っぽさは失われるだろうが、どうもこちらに軍配があがりそうである。

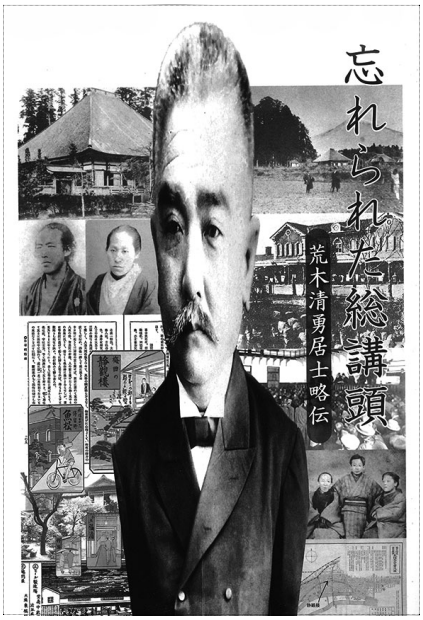
また登勢の長男七代目寺田伊助の消息について、坂本竜馬の研究者らは不明としてきたが、『布教会報』『法王』などの大石寺門流の機関誌により、有力な信仰者としての氏の足跡が、みごとに明らかにされている。これらは龍馬研究者にとって、まさに「目鱗」ものであろう。

一方宗門史に目をやれば、「＊御奉公のはじめ―所轄本山問題」（ｐ17）「＊戒壇御本尊の一時秘匿」（ｐ21）では、明治六年、前年に布告された政府の一宗一管長令によって、大石寺が一致派日蓮宗の所轄下におかれる危機に瀕した際、大石寺は一本山独立の請願をするが、そ

の時二十三歳の若き清勇居士が日胤上人に随行して上京したことが詳細に述べられている。そして菅野師は、この時の上京の主目的は、実は万が一日蓮宗の傘下に置かれた場合の措置として、極秘裏に戒壇本尊を東京本郷の前田邸に遷座することにあったと見る。諸事勘合してのその推測はおそらく妥当なものであろう。のちに清勇居士がこの時の上京を「講中の主なる諸君とも永別の水盃」を交わしての、決死のものであったと述懐していることが、そのことを雄弁に物語っている。

「＊官有林伐木事件」（p51）は、明治十六年上地令により、大石寺山門付近の境内林が上地官有林とされた上に、旧徳川幕臣行岡正号に払い下げられ、伐採されんとした際に、憤激した僧侶檀徒と買受人との間で暴力沙汰が起き、買受人側に刑事告訴され、こじれにこじれた事件である。この厳しい状況を打開すべく、日霑上人より要請を受けた清勇居士は、裁判所や役所に奔走し、みごと事件の沈静化を果たしている。

さらにこの頃から明治十九年頃にかけて、大石寺は明治十四年の六百五十遠忌後の借財や、右事件などにより、膨大な債務を抱えることになる。こうした危機的状況下、明治十六年に全国の僧俗代表を本山に招集し、それを打開すべく護法会議が行われたが、その際議長には仙台仏眼寺の大石慈含師（後の日応上人）が、そして副議長に清勇居士が選出された。



『忘れられた総講頭』

氏は寝食を忘れて東奔西走し、その窮状を救っている（「護法会議」p56「＊本山の経営危機とその原因」p73）。

清勇居士を語る上で忘れてならぬのは、氏が法論の達人であったことである。それは生来の度胸と明晰な頭脳、そして日々怠らぬ猛烈なまでの法義研鑽によっている。

そのデビューは明治九年二十六歳の時、現在の大阪府豊能郡能勢町倉垣の日蓮宗妙法寺を相手取っての、いわゆる「倉垣問答」である。先陣をきった清勇居士の前に、相手は一言も反論できなかったという。

圧巻なのは大正六年に惹起した田辺善知との法論である。田辺善知は顕本法華宗から日蓮宗に転じ、日蓮宗大学（現立正大学）に奉職していたが、その年の一月から二月にかけて大学近くの大崎館において、「高等批判日蓮正宗教義一班」と題し、「日蓮本仏論」「文底秘沈論」「戒壇論」について、三回にわたり批判

演説を行った。清勇居士は間髪を入れずその二週間後に、同じ会場にて大反論演説会を催し、「日宗大学講師田辺善知先生反駁演説会」と題して、三時間四十分にわたり反駁を加えた。その記録は『長夜の大燈』と題して発刊されているが、その反駁は「田辺善知が日興門流の法義に暗いまま感情的に批判しているのに対し、紳士的に礼節を失わず道理文証をあげて理路整然と」（p152）したものであるという。これを機に是非一度その全文を拝読したいものである。田辺善知はそれに対し「在家は相手にしない」と逃げた。

また『法華』誌上で繰り広げられた、当代きっての学者と謳われた国柱会山川智應との論戦は、高度で実に堂々たるものであったという。これも機会あらば拝読したい。

翻って今日宗門の有り様はどうか。菅野師は厳しく次のように警鐘を鳴らしている。「両者の堂々たる論陣をみるにつけ、昨今の宗門や学会の中傷誹謗合戦の悪質さを思うのである。日蓮大聖人の門下たるもの、主張の違いはあったとしても、論争においては、このように公明正大で、フェアーな態度でなければ、却って宗祖の御名を汚すことになるのではなかろうか。」（p162）

この他様々なエピソードや業績が次から次へと展開されているのだが、その詳細を紹介する紙数はもはや尽きつつあるようだ。この際読者諸氏に、是非とも本書の熟読を推奨しておこう。

清勇居士は激動の宗門を総講頭として支え続け、大正十二年十月二十八日、子息福重照平師が住職を勤める滋賀県高島の妙静寺にて、静かに生涯を閉じた。行年七十三。辞世の歌「老いぼれし身の永らえて詮もなし　生まれ変わりてご奉公せん」

◇　◇　◇

本書を閉じてフーッと大きく息をつく。なんともいえぬすがすがしい気持ちである。巻頭の清勇居士の写真はむしろ重厚な面持ちで、その行動力はまるで重機のようだ。本書の内容も、ある種宗門の裏面史も含まれていて、けっして軽妙というわけではない。にも拘わらずこのすがすがしさはなんだろう。おそらくそれは、本書全体に貫かれている、清勇居士の私を一切捨てた、護法に徹する真っ直ぐな潔さによるのであろう。そこには「名聞名利」のかけらも見られない。

この真っ直ぐな心の、万分の一なりとも受け継ぐ者でありたい。

源立寺法華講以外の方で、
『忘れられた総講頭』
の本をご希望の方は、左の書店にご注文ください。
◆東陽堂書店（東京）
電話…03－3291－0078
◆藤沢書店（大阪）
電話…06－6373－0779

恵日だより

南近畿法華講研修会

十一月二十四日（日）午後一時

今年の南近畿法華講研修会は、十一月二十四日午後一時に大阪歴史博物館に現地集合にて開催されました。

源立寺からは九名参加でした。

歴史博物館では、まず大阪の古代の地層、地形図から難波宮に遷都し発展した背景や、朝鮮国との交流、文化の発展等について展示物を通して拝見しました。その後、平安時代、鎌倉、戦国期、江戸、明治から近代に至るまでの庶民の暮らし、文化の発展に関する展示物を拝見しました。

大阪が天下の台所とか、昭和初期には東洋のマンチェスターといわれて栄えた所以等の展示物も、大いに興味を引きました。

大阪歴史博物館の見学後、有志にて大阪城の見学も行いました。

個人では、なかなか見る機会がない博物館ですので、参加された方は、我が住む町の歴史を知ることができ、大いに勉強になった研修でした。

七五三祝い

十一月二十三日・十二月十四日

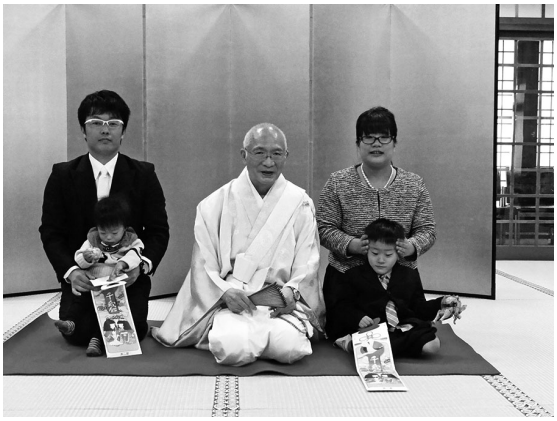
・高石市　古田　鈴さん　三歳
・丹波篠山市　森　晃生くん　四歳

ご案内・お知らせ

＊成人式のご案内

今年の成人式は一月十三日（月）午後三時より、源立寺本堂にて奉修いたします。

檀信徒のご家族で該当される方（平成十年〈一九九八〉四月二日～平成十一年〈一九九九〉四月一日）は、お申し出下さい。（十三日以外をご希望の方は、ご希望の日時をお申し出ください。）



森家のみなさん

七五三　古田家のみなさん

＊合同役員会のお知らせ

一月十二日（日）の新年初お講終了の後に、幹事・地区役員合同の役員会を開催します。地区の活動を円滑に行うために、幹事・地区役員さんはご参加下さい。

＊役員研修会のお知らせ

一月十九日（日）午前十時より、本年の役員研修会を行います。

この研修会には、幹事・地区役員全員のご参加をお願いします。

＊法華講総会記念号の原稿募集

令和二年五月に開催される法華講総会は、第五十回の記念総会になります。

この記念の総会に当たり、広く法華講員の方々より原稿を募り、『恵日』の記念号を発刊したいと企画しています。

法華講の皆様におかれましては、みずからの信仰との出会いや歩み、正信覚醒運動のこと、また、ご自分の趣味や身の回りのことなど、ジャンルは特に問いませんので、ご自由に投稿をお願いします。

なお、原稿の締め切りは、二月末日を予定しています。直接お持ちいただく場合は、源立寺受付まで。また、メールにての投稿は、

「qkanno@silk.ocn.ne.jp」
「godo-otn@asahi.email.ne.jp」まで。

【睦月詠草】

夕映えに　しばし見とるる　大みそか
何か良き事　ある心地して
〔和　風〕

前日に　姑煮てくれし　小豆にて
赤飯を炊く　我が誕生日
〔故奥　はつ〕

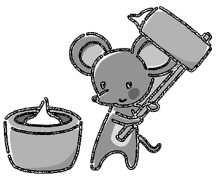
百五十まで　いきて私の　孫見てと
敬老の日の　孫が手紙に（当時小三）
〔農　婦〕

野火の煙　歌垣山を　おほふまで
ひろごりにつつ　霧にとけゆく
〔森　秀之〕

【恵日俳壇】

農の事おほかたなるに日記買ふ
裏白の長きを置きて餅傾ぐ

これを見に一筋の道雪の山
朝焼けや空に満月冬の路
正座して一念発起お正月



一月の行事

一　日（水）　午前〇時　元朝勤行会
一日～三日　午前十時・午後二時　正月勤行会
七　日（火）　午後二時　広基寺初お講
十二　日（日）　午後一時　初お講・合同役員会
十三　日（月）　午後一時　お講
　　午後三時　成人式
十九　日（日）　午前十時　役員研修会

※二月号の継命・恵日発送は、
『豊能』地区が担当です。
三月号の継命・恵日発送は、
『兵庫』地区が担当です。

令和二年度　年回表

壱周忌	令和元年（平成三十一年）		
三回忌	平成三十年		
七回忌	平成二十六年		
十三回忌	平成二十年		
十七回忌	平成十六年		
二十三回忌	平成十年		
二十五回忌	平成八年		
二十七回忌	平成六年		
三十三回忌	昭和六十三年		
三十七回忌	昭和五十九年		
五十回忌	昭和四十六年		

恵日　令和二年一月号　通巻三〇〇号

令和二年一月一日発行

編集兼発行人　菅野　憲道

発行人　菅野　憲道

発行　恵日編集室

〒563-0057　池田市槻木町一－一〇　源立寺内

TEL（〇七二）七五一－三一三五

E-Mail　qkanno@silk.ocn.ne.jp

購読料（含送料）　年間二〇〇〇円

加入者名　恵日編集室会計

〒振替口座番号　01380-2-126649

恵日　一月号　通巻三〇〇号　令和二年一月一日発行（毎月一回一日発行）　編集兼発行人　菅野憲道　発行所　〒563-0057　池田市槻木町一－一〇　源立寺内　恵日編集室　購読料（含送料）　年間二〇〇〇円